

コード譜を用いた読譜学習システムの開発

矢野 琢己

近年、小学校、中学校と音楽教育を受けてきたにも関わらず、読譜能力が身につけている学生が少ない状態が続いている。その理由としては、音符諦め症候群にかかっているから、というものがあげられる。これは、演奏されたものを聞かないと楽譜が把握できないため、読譜に全く取り組もうとしない現象である。高等学校における学習指導において求められているものは生涯にわたり音楽を愛好する心情を育てるという点であり、これを育てるためには表現や鑑賞する力の育成を行う必要がある。現在はCDやDVD、カラオケ、映画やテレビの音楽の地位の確立などにより、音楽が身近な存在となっているため、鑑賞能力は十分に育成されていると考えられる。しかしながら、表現する力がこの音符諦め症候群により育たなくなってしまう。この現状を改善すべく、本研究ではコードを用いた読譜学習システムの開発を行った。

読譜能力とは、楽譜に書いてあるものを音楽として表現する、音程をつけて歌ったり、演奏したりすることである。この能力は、楽典的知識と音楽的記憶力の2つに分けることが出来る。楽典的知識とは、楽譜上に表示されているものを理解できるようになる、というものである。音楽的記憶力は音感とも呼ばれているが、任意の音を聞いた時に、その音がどの音程であるかを理解できる能力のことである。この音楽的記憶力は楽典的知識に比べて習得に時間がかかるため、長期的に訓練を行う必要があるとされている。

現在、読譜学習システムは数多く存在するが、それらは全て音符のみ用いられている。それに対して提案システムではコードを用いている。コードとは、譜面上部に書かれているアルファベット、あるいはアルファベットと数字が組み合わせられた文字列のことである。音符ではなくコードを用いる利点としては、楽譜全体の流れを理解しやすくなる、アレンジを行うことが容易にできるため音楽を楽しめる、跳躍音程の感覚が身に付くなどがあげられる。また、提案システムはHTML5とJavaScriptを用いたiPadアプリケーションであり、4ステップに分けられている。ステップ0から順に、より実践的なトレーニングが出来るように設計されている。

本システムの有用性を評価するため、コードに関する知識がない高校生8名を対象に評価実験を行なった。4名は教本、残る4名はシステムを用い、使用前、使用中、そして使用後にコードカードを用いて3回のテストをそれぞれ行い、読譜能力の変化を調べた。その結果、教本を用いるよりもシステムを用いたほうが読譜能力の向上がみられることがわかった。また、全員がコードに関して興味をもったことから、本システムによる学習が生涯学習につながる可能性が示唆された。

(指導教員 鈴木伸崇)